

平成二十一年八月一日発行（毎月1回1日発行） 通巻八三五号
昭和二十五年四月三日第三種郵便物認可

火星

平成二十一年八月号



七曜抄 (六)

山尾玉藻

菅貫へゆく顔ならべ舟の上

雨粒の音のはじめの青芭蕉

鉾立の地下足袋と縄走りたる

鉾立やニツカボツカがコンビニに

鉾町の隅の夕映え濃かりけり

祇園会の水流れあるロビーかな

女子キャンパス祇園会の水打ちてあり

振花に立ちすこやかなる腓

瓜畑の昼をぬけゆく笑ひ声

雲の峰ラーメン屋より僧出で来

太白星

柳生千枝子

青葉洩る光斑を被て子ら走る
振花の小さき花の螺旋階
老ゆるとは記憶あとさき百合匂ふ
自販機の缶がごろんと夏来たる
眼圧を計られてをり薔薇匂ふ
サングラス外し麻布の叔父なりし
言ひ訳をしても遅刻や柿の花

杉浦典子

青葉木菟父の鼓の緒のゆるび
青葉木菟月のなき夜のおほきな木

ピカソ展出できしかほの夏めける
メンソレータムの蓋の少女や夏きざす
古茶の筒新茶の筒と並べけり
青岬より戻りきし魚籠しづく
紙垂張られこども神輿の道となる

浜口高子

毎日が日曜蟻の穴のぞく
子子の律儀な振りに暮れにけり
浸りぬし雑巾つかむ朝ぐもり
夏大根たつぷり下ろす葬あと
卯の花腐し野鍛冶の音の地を這へり
走り来て馬穴の水を羽抜鶏
滴りにきらめく苔や遠忌なる

火星作品

山尾玉藻選

接木せし夜の父なりよそよそし
大和郡山城 孝子

母賺しをれば卵の花腐しかな

波の上を蝶とんでゐる梅雨入かな

六月の天地めぐるリフトの音

夕ぐれの青梅のこゑ聞いてをり

火を熾す役目大事や山女釣
宝塚山本耀子

藻畳を潜り抜けたるかるの子よ

鳩の巢を艫音の過ぐる日の盛

青梅やにはとりの影伏せ籠に

サーフボード砂に突つ立つ日雷

蚊柱の焰の形に遡る
河崎尚子

蝮つつくよそ様の子を叱りけり

岩ずらし子の輪涼しき声あげし

木 苺の崖へもたせてある梯子
船 端に裸足をかけて読む潮目
余 呉人に夜の底ありぬ牛蛙
大 寺は湯茶を絶やさず半夏生
落 し文つぎつぎにあり捨てにけり
窓 口のもめてゐるなり扇風機
竹 生島行きの水尾なり朝曇
く ろがねの稚魚わき出づる青葉闇
井 戸水のはじめ濁れる桐の花
八 十八夜子連れの雉が茶畑に
昼 月の際立つ白さ麦を刈る
栗 咲いて思はぬ景の村の口
お 祓ひのあとの椅子百夏つばめ
青 葉光嬰のおくびの祓はるる
鮎 の骨きれいに残し病み給ふ
杉 玉より天道虫の発ちにけり
膝 にあご載せて爪切る立夏かな

西宮米澤光子

明石戸栗末廣

宝塚蘭定かず子

選のあとに

山尾 玉藻

六月の天地めぐるリフト音 城 孝子

山裾と山巔を往復するリフトの音を「天地めぐるリフト音」と表現して大袈裟な感じがしない。森羅万象の瑞々しい息づかいを包有する季語「六月」が、読み手を豊潤な世界へと誘い、至つて詩的要素に欠ける「リフト音」にしなやかな生氣を感じさせるからであろう。眼とこころを働かせた、作者会心の一句であろう。

青梅やにはとりの影伏せ籠に 山本 耀子

一見、ごくありふれた田舎家の景である。しかし、「青梅」の大きな切れの働きで、沢山の光沢ある「青梅」が眼に溢れてきて、ときおり籠目を透ける「にはとりの影」の印象も一層濃くなる。静かな穏やかさで読み手のこころも満たされてくる。「青梅」の瑞々しい生氣に満ちた緑は、我々の五感をどんだん澄んだものとする。

岩ずらし子の輪涼しき声あげし 河崎 尚子

子供たちが海辺か川辺で岩に潜む蟹や小魚でも採つて遊んでいるのだろう。「子の輪」の具象に、岩をとり囲んで一点を凝視する子供たちの様子が窺える。「涼しき声あげし」は

子供たちの喜びが弾けた一瞬を鮮やかに捉えた表現であり、自ずと水辺の涼感も感じられて快い。

落し文つぎつぎにあり捨てにけり 蘭定かず子

初めは「落し文」が珍しくて掌にころがせていたのだが、その内に「落し文」が次々に見つかり始めた。さぞ「嬉しかり」かと思いきや、意外にも「捨てにけり」である。しかしこの虚を衝くような表現は人間の勝手な心理を見事についている。人間は簡単に手に入るものには興が湧かないもので、納得の「捨てにけり」である。豪速の直球勝負の一句。

栗咲いて思はぬ景の村の口 戸栗 末廣

黄白色の栗の花は梅雨空を一層うつとうしくし、また独特の匂いがあるので、一般的に余り好まれない花である。しかし掲句にはそのような概念に縛られない意外な驚きがある。作者も栗の木の繁る「村の口」を常は変哲もない景と思いついでいたのであるが、今日栗の花盛りの「村の口」を見て少し新鮮な思いを抱いたのである。それが「思はぬ景」なのである。「思はぬ」の表現には実体を感じられないが、美しいとまでは思わずとも案外にこころ惹かれたことが推察される。この場合、「思はぬ」の曖昧さが栗の花には相応しい。

恒星圈

高尾豊子

産声の青葉闇よりとどきけり
新米の親子の授乳薄暑光
ほうたるに夜泣きの嬰の大欠伸
みどり児の眠りある闇ライラック
赤ん坊に拳がふたつ柿若葉

城孝子

高松由利子

スカートををはなれぬ風や蓬摘む
とぶ鳥のかほ見えてゐる梅雨入かな
すぐ横によその夫ゐる桐の花
梅雨に入る日の胸もとのとんぼ玉
鑑真に啼く老鶯の二つ三つ

青時雨むかしサロンの虫籠窓
夏やせの阿僧伽菩薩の肩に鈴
黄菖蒲の溝川にそふ占ひ屋
水口へせせらぎ落とす更衣
陵の水より低く田水張る

大東由美子

田中みのる

裁ち鋏おほきく使ふ夏始
歩みゆく人を見てゐる躑躅かな
桜しべ踏んでお針子さんの道
野あざみを摘んでまだまだ帰らぬ子
露摘むや風来て傘を取り落とす

万葉西宮万葉園にて五句の木々を従へ夏の桑
桑の実の熟るる老木撓ふほど
梅の実に赤子の尻を思ひけり
うまし子の犬ころを曳く青葉かな
しばらくは立ち去り難く花檮

獅子座

山尾玉藻推薦

緒方佳子

薰風や中華飲茶の二人前
清掃課鳩の浮巢を持ち行きし
花山葵水分れあひ流れあひ
熟年のリズム体操麦の秋

助口弘子

菊根分け終へたる顔を園芸員
日の暮に残されてゐる草いきれ
若葉風伎芸天女に立ちつくす
道の辺に万葉歌碑や鼓草

渡辺数子

青葉木菟下戸の夫に酒届く
神官の櫛掛けなる菊根分
菖蒲根分泥に馴染みて終りたる
柿接木したる大廈の疏水べり

笠置早苗

五月来る菊の挿芽の日を決めし
玄関にゆすり蚊の群待ちあたり
朝日さす蛇の鱗の真さらかな
草笛を吹く目つむれば山河あり

岩井ひろこ

塾の灯の煌とともれる青葉木菟
日直が黒板を拭く更衣
万緑や手で操れる一輪車
夏めくやピアスの揺るる陶芸師

涼野海音

静かなる飲食の音蝶生る
にぎやかな隣の部屋や柏餅
夏落葉煙草の匂ひせる男
葉桜や膝の上なるベレー帽

松山直美

三つ四つは一つづつ咲き花水木
筍の運び込まるる体育館
潮の香の中州揺さぶる樟若葉
白藤の中よりハーレーダビッドソン